

サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り (9)

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。それらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。以下、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。

なお、誌面に文字数制限があるため、詳しくは「真の父母様宣布文サイト (http://trueparents.jp)」の掲載文や映像をごらんください。(教会成長研究院 注・本文中、真の父母様のみ言は「青色」で、サンクチュアリ教会側の主張は「茶色」で色分けしています。

【19】文亨進様は、真の父母様から「王権」を継承されていない

(1)「万王の王神様解放圏戴冠式」は、亨進様の王権継承の儀式ではない

サンクチュアリ教会側の人々は、「文亨進様家庭は、真の父母様の『王権』を継承されたのだ」と主張します。

彼らが「王権の継承」の根拠としているのが二〇〇九年一月十五日に韓国、同年一月三十一日に韓国と米国の、計三度にわ

たって行われた「万王の王神様解放圏戴冠式」【写真参照】であり、「そのとき王権が継承された」と主張します。しかし、

この式典はその名称が示すとおり、神様と真の父母様が一心、一体、一念、一核となって「万王の王」として戴冠された式典であり、亨進様が「王権」を継承した式典ではありません。

亨進様が真の父母様から「王権」を継承して、「王様」になつたという話は、今までに聞いたことがありませんし、その事実もないのです。



この式典は、神様と完全一体となられた真の父母様が、神様を王様として戴冠させてさしあげた式です。そして、王権を確立された真の父母様を中心とする「真の家庭」の四位基台の立場において、亨進様が一緒に

なつてその恩恵にあずかり、真の子女の立場でその場に同参したのにすぎません。この式典は、あくまでも万王の王としての神様の「解放圏戴冠式」だったのであり、その主役は神様と真の父母様です。決して「王様」の立場が、子女様の代に委譲、継承されたということではありません。

せん。

式典の「式次第」「司会者の言葉」、および真のお父様の「み言」を調べると、一言たりとも、「亨進様に「王権」を継承します」という文言は語られていません。このときの式典の「司会者の言葉」「式次第」「み言」のすべては、事前にお父様が一言一句チェックされ、司会者に対しても「そのごとく語るように」と指導しておられたのです。

この式典で、真のお父様は次のように語っておられます。

「貴賓の皆様！きょう、皆様は、真に貴い天福を受けられました。万王の王が経綸する摂理的歴史の出征式に参加していらつしやいます。歴史的な大転換期の渦を直接目撃していらつしやいます。縦的万王の王であられる神様の実体として万有を統治する横的万王の王、真の父母様の戴冠式に招待されました。これ以上に貴く、歴史的な瞬間

が、またいつ訪れるでしょうか」(「ファミリー」二〇〇九年三月号、七ページ)

真のお父様は、万王の王神様解放圏戴冠式が「縦的万王の王であられる神様の実体として万有を統治する横的万王の王、真の父母様の戴冠式」であると語っておられます。この式典は「神様」およびその実体の立場に立っておられる「真の父母様」の戴冠式だったことを知らなければなりません。お父様が式典の意義を明確に語っておられるにもかかわらず、この式典に対し、真の子女様が「王権を継承した式典である」と述べることは、事実をねじ曲げることであり、完全な誤りです。

写真を見れば分かるように、亨進様ご夫妻がかぶられた冠は、せいぜいプリンス(王子)がかぶる「コロネット」、プリンセス(王女)がかぶる「ティアラ」程度のものであったのであり、万

王の王としての「王様」がかぶる冠とは言い難いものです。

ところで、「式典の途中、お父様が『祝祷』された部分こそ『王権の継承』であった」と主張する人もいます。しかし、それも誤りです。それが誤りであるのは、式典の司会者の言葉を含め、前後の一連の内容を吟味することでより明白になります。「祝祷」前後の内容は次のようになっています。(以下、式典映像のダイクテーション)

【司会者の言葉】

神様の実体として立ち、万王の王戴冠式をなされるために、(真の父母様が)今入場していらつしやいます。そのあとには、真の子女を代表して世界平和統一家庭連合、文亨進世界会長ご

夫妻が入場していらつしやいます。そして、そのあとに十名のお孫様が続き、三代圏が一つになつて入場していらつしやいます。人類歴史に新しい始まりを

告げる驚くべきこの時において、万王の王神様解放圏戴冠式のために入場していらつしやいます。

(真の父母様)ご夫妻が天のお父様に心からの礼を表していらつしやいます。熱い歓声と拍手で歓迎いたしましょう。

(真の父母様が神様に礼をささげる)ご夫妻が天のお父様に心からの礼を表していらつしやいます。

(真の父母様が玉座に座られた後、亨進様夫妻がその前にひざまずいて敬礼をささげる)文亨進世界会長ご夫妻が天のお父様と天地人真の父母様に敬礼をおささげしています。

(真の父母様が『平和神経』を下賜)

平和の王天地人真の父母様が、全人類を代表する文亨進世界会長ご夫妻に『平和神経』を下賜されます。続けて祝祷をしてください。

【真の父母様の祝祷】

「天宙天地父母様安息圏安着

即位式において、真の父母様の祝福を伝授いたします。アーヂュ

【司会者の言葉】

次は御宝と指揮棒を(真の父母様に)奉呈する時間となります。

(真の父母様に指揮棒を奉呈) 私たちを代表して天総官文興進様家庭の長男、文信哲様が指揮棒を真の父母様に奉呈しています。(ダイクテーション終わり)

一連の式典の流れで分かるように、真の父母様が全人類に『平和神経』を下賜されるとき、その全人類を代表する立場で亨進様ご夫妻が『平和神経』を受け取られ、「祝祷」を受けておられるのです。これは、あくまでも人類に対し真の父母様が『平和神経』を伝授されること、そのための「祝祷」であり、決して亨進様ご夫妻が「王権」を継承して王様になったものではありません。事実、祝祷の

言葉も「祝福を伝授いたします」というものであり、決して「王権を伝授いたします」といった内容ではありませんでした。

ちなみに、「天一国」の名称を正式に言えば「宇宙平和統一国」ですが、これは霊界と地上界を併せた「天宙」の平和統一国であり、その中心は永遠に「万王の王」であられる神様と真のお母様です。真のお父様と真のお母様が霊界に行かれた後も、天一国の中心は永遠に神様と真のお父様であり、その点については、かつて亨進様も「真のお母様は永遠に一組です。子女は子女であって、真の父母になることはできません」と語っておられました。

また、「万王の王神様解放圏戴冠式」が挙行された同年十一月十四日、亨進様はお父様から「このメッセージをみんなの前で語りなさい」と命じられ、次のように語っておられます。

「私(亨進)が、真のお母様

を否定したり、真のお母様に従わなければ、統一教会人たちは、私に従ってはいけません」

真のお父様と言うとき、それは真のお父様だけでなく、そこに真のお母様が含まれます。したがって、今現在、お母様を否定し従おうとされない亨進様に「統一教会人たちは従ってはいけない」というのがお父様のみ意です。

「万王の王神様解放圏戴冠式」が挙行された年に、真のお父様が亨進様に對し「このように語りなさい」と命じられた事実を考えると、亨進様が現在のようになられる可能性があることを、そのときお父様は予見しておられたのではないかと思われま

(2)「新しい王に従わないと地獄へ行く」という言説の誤り

前項で述べたとおり、文亨進様は、真のお父様から「王権」を継承された事実はありません。

したがって、亨進様は「新しい王」になられたわけではありません。

ところが、サンクチュアリ教会側の人は、「亨進様は王権を相続したのであるから、その新しい王に従わないと地獄へ行くことになる」と語り、教会員たちを畏怖、困惑させています。

天一国の永遠の中心は、神様と真のお母様です。その中心は、万人を導いて救われることに目的を持っておられるかたであり、人々を裁き、地獄に落とすことが目的のかたではありません。したがって、「新しい王に従わないと地獄に落ちる」と畏怖、困惑させるのはとんでもないことであり、全人類を考えながら「万人救済」を目指しておられる真のお母様の精神に反するものです。

ところで、サンクチュアリ教会側の人で、「亨進様夫妻に、王権を國進様が伝授したのだ」

伏して一体化してこそ蕩滅条件となりうるものです。したがって、父母の代身として立つてもいないアベルとカインがどんな一つになっても、それは摂理的に意味がありません。

今や人間始祖の立場であられる「真の父母」が立たれた時代圏において、真の父母様は復帰摂理を勝利され、創造本然の世界の「定点」に立つておられるかたです。真のお父様は、真の父母が現れるときが歴史上の「定点」をなすときであると、次のように語っておられます。

「人類の真の父母が現れることが歴史の願いであり……摂理の願いです。ですから、そのような真の父母が現れるときは、歴史上で一度しかない定点をなす時であり、空前絶後の時なのです」(八大教材・教本『天聖經』二〇〇三ページ)

このように、歴史上でたった

一度しかない真のお母様が現れる時こそが「定点」をなす時であり、永遠の歴史の中心であることを忘れてはいけません。したがって、真の父母様が立たれた状況下においては、真の子女様におけるカイン・アベルとは、復帰していく立場ではなく、どこまでも真の父母様の勝利圏を相続していく立場にあります。それゆえ「王権の伝授」は、どこまでも神様と真の父母様から与えられなければならないのです。

事実、復帰摂理におけるカインとアベルの一体化は「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」とはなりません。「王権の伝授」とはなりえません。それは、せいぜいが「長子権」復帰にすぎません。そしてまた、カイン・アベルの真の一体化のためには、お父様のみ言によれば、そこに「母子協助」が必要不可欠です。今や、お母様と一体化できず、母子協助することすらできない

立場におられる子女様です。どのようにして「母子協助」があったと言うのでしょうか？

真のお父様は、二〇〇八年四月六日の第四十九回「真の父母の日」(ハワイでの式典)のみ言で、子女様たちをお父様の前に立たせて次のように語っておられます。

「あなたたちカインとアベルが、お母様の言葉に絶対服従しなければなりません。……あなたたち兄弟同士で争って分かれることはできません。それが父母を殺した元凶です」(『ファミリー』二〇〇八年六月号、三〇ページ)

この真のお父様のみ言に従って、「お母様の言葉に絶対服従」しておられる真の子女様はどなたなのでしょう？ たとえ子女同士で一つになったとしても、真のお母様と一つにならなければ意味がありません。

と主張する人がいます。果たして、國進様が亨進様に對して王権を伝授するということが、原理的にありうることでしょ

か？

『原理講論』に記されているように、復帰摂理におけるカインとアベルは、あくまでもアダムを善悪に分立した立場であり、アベルは「アダムの代身者」にすぎません。それゆえ『原理講論』は、「彼ら(カインとアベル)が『墮落性を脱ぐための蕩滅条件』を立ててサタンを分立したならば、その父母であるアダムはサタンを分立した立場に立つことができるので、その子女たち(カイン・アベル)よりも先に『実体基台』の上に立つようにな(る)」(三〇〇ページ)と説明しています。

復帰摂理におけるカインとアベルは、蕩滅復帰のためのアダムの代身として立っている立場です。アダムの代身として立つたアベルを中心に、カインが屈

また、「王権」を相続すると言われますが、真の父母様の歩まれた道は、縦横の八段階を経ながら、まず「長子権」を立てられ、その次に「父母権」を立てられ、その基台の上で「王権」を勝利していかれました。それと同様に、もし、亨進様が「王権」の位置に立とうとされるならば、その前に「長子権」「父母権」を立てなければなりません。では、それらの内容をどのように復帰していかれたと言われるのでしょうか？

今現在、亨進様や國進様がしておられることは、真の父母様のみ言から懸け離れており、原理的ではありません。私たちは、真のお父様が「みんなの前で語りなさい」と亨進様に命じられた「私(亨進)」が、真の父母様を否定したり、真の父母様に従わなければ、統一教会人たちは、私に従ってはいけません」を思い起こさなければなりません。でしょう。